

申請者	学科名	保健福祉学科	職名	助教	氏名	澤田 陽一
調査研究課題	パーソナリティ特性を支える認知機能の探索					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	澤田 陽一	保健福祉学科・助教		実験心理学	計画立案/統括・実験遂行
	分担者					
調査研究実績の概要	<p>【目的】 Big Five（外向性・神経症傾向・開放性・同調性・誠実性）に代表されるパーソナリティ特性は、成人期から高齢期にかけて、比較的安定して推移することが知られている（Terracciano et al, 2005）が、高齢期以降は脳機能の器質的・機能的変化によって著明な変化が生じる。特に、前頭葉損傷患者や前頭葉機能が低下する疾患（パーキンソン病、前頭側頭葉変性症や統合失調症など）において、パーソナリティ特性の変化が生じることから、前頭葉が主に関連していると考えられている。しかし、前頭葉、特に認知機能に関連する前頭前野は背外側、腹側、内側面、眼窩面の4つの部位で機能分化しており、各々が担う機能がどのパーソナリティ特性と関連するのか、あるいは認知機能の低下がパーソナリティにどのような影響を与えるかはほとんど検討されておらず、明確ではない。そこで本研究では、パーソナリティ特性を支える認知機能（特に前頭前野が担う種々の遂行機能）を探索的に検討することを目的とする。</p> <p>【方法】 ■対象者・被験者： 本学大学生および大学院生95名。 ■パーソナリティ特性の把握： 日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) によりパーソナリティ特性Big Fiveを把握した（10項目の簡易的な質問紙により、Big Fiveを取得した）（小塩ら, 2012）。 ■認知機能検査： 本研究では認知機能の中でも、前頭葉との関連が示唆されている下記の遂行機能に関わる心理検査および実験課題でバッテリーを組んで実施した。 ① Stroop colour-word 検査（背外側前頭前野/内側部の機能を反映）⇒刺激に対する反応選択機能（注意）や無関連な刺激の抑制機能を評価する検査。 ② Trail Making 検査（背外側前頭前野の機能を反映）⇒課題遂行にかかる時間により「セット転換能力」を評価する検査。 ③ 言語流暢性検査（腹側前頭前野の機能を反映、カテゴリ課題：動物・職業・スポーツ、語頭課題：あ・か・し、動詞課題）⇒発動性・方略性や注意機能等を評価する検査。 ④ 語音整列（前頭前野全般の機能を反映、日本語版Wechsler Adult Intelligence Scale-Ⅲの下位検査）⇒ワーキングメモリおよび注意機能を評価する検査。 ⑤ 推定IQ値（日本語版Wechsler Adult Intelligence Scale-Ⅲの下位検査）⇒全般的な知能を測定した。</p>					

調査研究実績
の概要

■分析方法：

独立変数を各認知機能検査の成績、従属変数をBig Fiveの各パーソナリティ特性とし、パス解析を用いて関連性を検討した。なお、年齢、性別、教育歴、K10（メンタルヘルス尺度）、不快指数（温度と湿度から算出）、Body Mass Index（BMI）を統制変数としてモデルに投入した。誤差間のいずれの解析においても、有意水準 α は0.05とした。

【結果のまとめ】

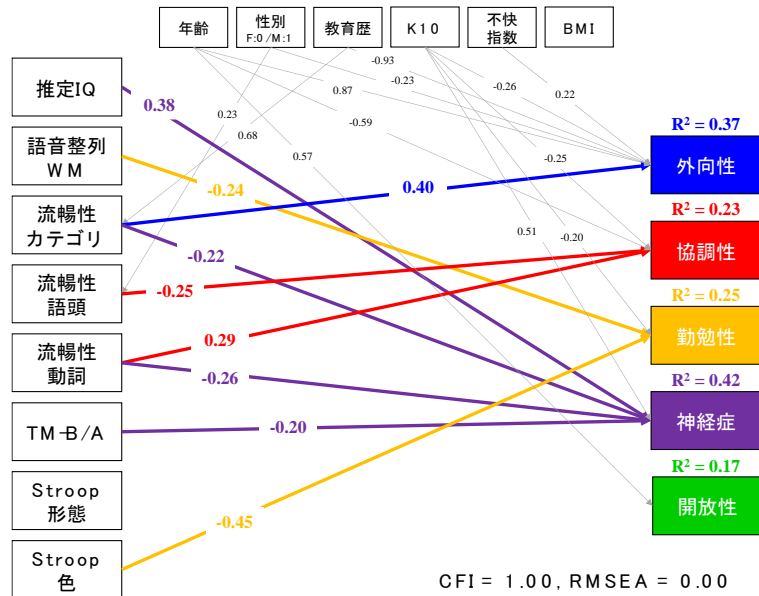


図1. パーソナリティ特性Big Fiveと認知機能との関連 (n = 95)

図中のパスは煩雑化を避けるため、統計学的に有意なパスのみ示した。
また、独立変数間・従属変数間・統制変数間の関連は省略した。

外向性は言語流暢性課題の中でも、カテゴリ課題において有意な正の関連性が認められた。協調性は流暢性課題の中でも語頭課題と負の関連性、動詞課題と正の関連性が認められた。勤勉性は語音整列課題と負の関連性、Stroopの色呼称課題と負の関連性が認められた。神経症傾向は推定IQと正の関連、流暢性課題の中でもカテゴリ課題および動詞課題、そしてTrail Making検査成績と負の関連性が認められた。また、開放性はいずれの課題とも有意な関連性が認められなかった。

以上の結果から、成人（若年者）の性格特性（外向性・協調性・勤勉性・神経症傾向）は認知機能（遂行機能）からある程度、推測できることが示唆された。

成果資料目録

なし